

[要旨]

ブッデنبロック家の倫理と資本主義の精神病

——マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズム・テーゼ」に照らして見たトーマス・マン『ブッデنبロック家の人々』

山室 信高

トーマス・マンの小説『ブッデنبロック家の人々 ある家族の没落』(1901)には、マックス・ヴェーバーの論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』(1904/05)の逆説的なテーゼ、すなわちプロテスタンティズムの天職理念と世俗内的禁欲のエートスが営利を追求する近代資本主義の世界史的発展に寄与したということが、名門商家の四代にわたる物語を通して形象化されている。小説が論文に先行していることからマンがヴェーバーを参照したことはありえず、マンは後にこのことに気づき、「私は近代的・資本主義の実業人、職業義務の禁欲理念を持った市民がプロテスタンティズムの倫理、ピューリタニズムおよびカルヴィニズムの産物であるという考えをまったく独自に、何も読まずに直観的に感得し発案した」と自らの先見の明を誇っている。本論では両作品がどの程度まで符合しているのか再検証するとともに、その符合関係がいかにかに生じたのかを考察する。

小説の舞台である19世紀のリューベックは世俗化したルター派の勢力が強いが、ブッデنبロック家には敬虔派(二代目ジャン)やカルヴァン派(三代目トーマス)の流れも入っており、自己の職業に禁欲的に励む合理的的生活態度が浸透している。また彼らの穀物商会は基本的にヴェーバーの言う伝統主義的な経営を行っているが、トーマスはそこにモダンな資本主義の精神の新風を吹きこむ。しかしやがてトーマスはワーカホリックに陥り、労働が自己目的化して、仮面をつけた役者のごとく自分の「体面」だけに拘るようになり、ついに資本主義精神の硬化した「鋼鉄の甲殻(stahlhartes Gehäuse)」に自縛されてしまう。

このようにマンの小説にヴェーバー・テーゼを十分に追うことが可能なのは宗派上の重なりもさることながら、両者が宗教を教義の理論レベルではなく日常の実践レベルで見ていること、そして資本主義の経済制度よりもむしろ精神性に注目しているからである。